

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 24 日現在

機関番号： 32621
研究種目： 基盤研究 (C)
研究期間： 2008～2011
課題番号： 20520478
研究課題名 (和文) 第二言語習得に個人差につながる言語適性 (記憶や音韻処理能力) に関する基礎研究
研究課題名 (英文) Empirical study of language aptitude (memory and phonological processing ability) that leads to individual differences in second language acquisition
研究代表者
小柳 かおる (KOYANAGI KAORU)
上智大学・国際教養学部・教授
研究者番号： 90306978

研究分野： 第二言語習得

科研費の分科・細目： 言語学・日本語教育

キーワード： 日本語学習者、情報処理、作動記憶、音韻意識

1. 研究計画の概要

第二言語としての日本語の習得に影響を及ぼす学習者の個人差がどこから来るのかという問題を、学習者の認知的な側面から探ることを目的としている。個人差の中でも特に影響が大きいと考えられている言語適性を構成するものは何か、発達段階で重要になる言語適性の構成要素とは何かを見いだそうとしている。

(1) 言語教育において言語能力とは何かという考え方は変遷してきており、それに伴い言語習得に必要な言語適性についても再概念化が必要だとされている。よって、文献調査を行い、問題を整理し、理論構築を行う。

(2) 初級、中級、上級の学習者から言語適性および言語能力のデータを収集し、それぞれのレベルで重要となる言語適性の構成要素は何か分析する。

2. 研究の進捗状況

(1) 第二言語習得のみならず、第一言語習得や学習障害、発達障害などの分野にも広げて文献調査を行った。その結果、言語能力を認知的な言語処理という側面で見ると、第一言語から第二言語へと連続する重要な基本的認知能力があることが示唆された。第二言語習得において言語適性を突き詰めていくと、言語処理の作業場である作動記憶の機能にたどりつく。作動記憶の容量、処理速度、さらに、作動記憶の一部である音韻ループ (音韻的短期記憶) や、情報処理を制御する作動記憶の中央実行系の注意制御機能などが、言語習得に関わっていることが明らかになった。文献調査の結果はレビュー論文にま

とめ、学術誌に投稿中である。また、本研究の背景にある理論の枠組みについて学会で 1 件発表を行った。

(2) 対面式で研究者一人でデータ収集を行い、初級・中級は統計分析ができるだけのデータが蓄積されてきたので、最終年度はその統計分析を始める。言語適性のデータについては市販の記憶や音韻処理能力のテストを用いた。補助的に学習スタイルなどの好みを問うアンケートも実施した。日本語能力については、筆記の文法・読解テストの他に、オラル・インタビューのデータも収集した。スピーチを、情報処理の観点から正確さ (誤用のない節の割合)、流暢さ (ポーズの長さ、非流暢さの特徴の数)、複雑さ (異なり語数、形態素の種類、従属節の割合) の観点からどう分析するかを、英語に関する先行研究を基に検討し、日本語の基準を設定した。上級に関しては、英語話者を対象としたところ、所属機関で該当者が少なく、まだ十分なデータは集まっていないので最終年度も継続してデータ収集を行う。オラル・データ以外の入力作業は終了している。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
文献調査は 1 年目で終える予定だったが、思いのほか文献が多く時間がかかったが、2010 年度中に論文をまとめることができた。データ収集は毎学期蓄積していく必要があったため、なかなか途中経過を結果として学会発表することが難しかった。最終年度は分析を進めることができると思う。

4. 今後の研究の推進方策

スピーチの文字起こし作業は、通常の会議などの文字起こしと異なり、言語学的な分析を加えながら行うため、時間がかかる。研究補助者を雇用して時間短縮を目指す。最終年度は分析作業に集中する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

小柳かおる「認知のメカニズムと言語学習-
認知的アプローチによる SLA 研究」第二言語
習得研究会第20回全国大会シンポジウム『日
本における第二言語習得研究の軌跡と展望』
2009年12月 南山大学

〔図書〕(計0件)